

# 『天和長久四季あそび』と『世諺問答』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 合瀬, 純華 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1429">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1429</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 『天和長久四季あそび』と『世諺問答』

合 瀬 純 華

一

延宝・天和期の江戸では絵師菱川師宣によって多くの風俗絵本が描かれたが、ほぼ同時代の成立と考えられる『天和長久四季あそび』は、この種の絵本としては非常に珍しい京都版で、民間風俗の画像情報も豊富な資料である。しかし、大正十一年に稀書複製会によって林若樹氏蔵本の複製が刊行された以外、従来特に顧みられることがなかったように思う。同書は絵主文従の「絵本」であるが、おもに「文」について万治三年刊『世諺問答』をもとに考究を進め、その上で「絵」の作者について試論を示したい。

二

『天和長久四季あそび』は、『若樹文庫取得書目』<sup>(1)</sup>によると、明治三十九年九月吉田金彦より購入し、「京都板にて年中行事を記したるもの。貞享頃の板敷、一冊」とある。しかしこの若樹文庫本は所在不明であり、現在確認できる原本は国立国会図書館本のみである。<sup>(2)</sup>『稀書解説』<sup>(3)</sup>には、「本書は京都民間の年中行事を描きて、それに頭註を加へたる絵本な

『天和長久四季あそび』と『世諺問答』

り。刊行の年月も、筆者も、出版元も記しあらざれども、題名の『天和』は其の内容の図式より見るも、たしかに出版の年号を利かせたるものと思はるれば、其開版は天和、貞享頃なるべし。されば絵の巧拙は別問題として、又序文と目録の相違はあれど、版式も内容も酷似したる元禄四年版の『月次のあそび』（第二期刊行）と相對照して、其頃の京都と江戸との年中行事を觀賞玩味するに便なるものなり。筆者は署名なければ不明なれど、図式は、天和、貞享より元禄の初期に互りての上方風の描法にして、元禄三年版の『人倫訓蒙図彙』に似通ひたる所あり。例へば、最後の一丁の如き、即ち物売り、物貰ひのその如きは是れなり。」としている。この『月次のあそび』については後に詳しく触れることにして、ひとまず国会図書館本『天和長久四季あそび』（請求記号、別一四一—一四）の書誌を記しておく。

表紙 改表紙 薄香色地銀菊唐草文様 縦二一・五糎×横一五・八糎  
 外題 なし

内題（目録題） 天和長久四季あそび

丁数 一三丁半（一四丁ウは欠）

匡郭 四周单边 縦一九・三糎×横一四・八糎 上欄（文）四・一糎 下欄（絵）一五・二糎

柱刻 黒口花魚尾 目録丁は「四きあそび」「以下「正月 二（十七）」飛丁は「十ノ十三」

目録 「天和長久四季あそび 十二月之因縁つきのゆゑ

正月 かど松の事 かざりなわの事／はねつくこと ほながゆづりはの事／たまうつ事 ざうにいほふ事

二月 はつむままいりの事

三月 はな見の事／にはとりあわせのこと

四月 ふじ見のこと／ゑいざんまいりの事／さんわうまつりの事

五月 かものけいば せつくの事／ちまきくふ事 いんじんのこと

六月 ぎをんゑのこと／みたらしまいりのこと

七月 七夕の事 ぼんのをどりの事／しやうれうまつりの事

八月 ほうじやうゑの事／月見の事

九月 きくのせつくの事

十月 神無月の事／いのこの事／もみじ見の事

十一月 おひたきの事

十二月 正月ことはじめ すゝはらひの事／せつぶんの事 もちつく事

挿画 見開き一三面 吉田半兵衛風

一丁ウ・二丁オ 「正月之祝儀」

二丁ウ・三丁オ (正月の七草・左義長など)

三丁ウ・四丁オ 「二月初午まいり」

四丁ウ・五丁オ 「三月花見」

五丁ウ・六丁オ 「四月ふじみ ゑいざん参／山王まつり」

六丁ウ・七丁オ 「五月節句 けいば」

七丁ウ・八丁オ 「六月 ぎをんのゑ／たぐすまいり」

八丁ウ・九丁オ 「七月大をどり」

九丁ウ・十丁オ 「八月放生会 并ニ／月見」

十丁ウ・一一丁オ 「九月菊の節句」

一一丁ウ・一二丁オ 「十月亥の子 もみ／ぢ見」

一二丁ウ・一三丁オ 「十一月御火たき 并ニ／みどり／参り」

一三丁ウ・一四丁オ 「十二月のてい」

国会本は稀書複製会本と同様に最終丁の裏が欠けているため、刊年、書肆名ともに不明であるが、印面に欠損した部分が目立つので、後摺りかと思われる。また、両本とも柱題を目録丁の「四季あそび」から、二丁以下を「正月」に変え、丁付も十丁目が「十ノ十三」と、三丁飛んでいる。このような飛丁が起こるのは、単純に本を作っている途中で間違えたか、あとから挿画を入れた場合や、貸本屋が貸し賃を多く取れるよう丁数の多い本に見せかけるため、などの説がある。ただ、見開きで絵が連続し内容も一二ヶ月とはっきりしている本で、なぜこのような柱刻の異同が生じたのか、やや問題が残る点である。(以下、『天和長久四季あそび』は『四季あそび』と略して表記する。)

### 三

『世諺問答<sup>(4)</sup>』は、室町時代の公家で学者でもある一条兼良が、民間の風俗について問答体で記したものとされる。だが、万治三年初版本の跋文に次のようにある。

右世諺問答は後成恩寺禪閣のかゝしめ給はんとてみとりのかみにかふばしき筆のあとをのこし給ふといへどもい(は)つかむ月のはしめより若水のみなもとにいたりて八ヶ条をし給ふついでにその切(功)をわか(ら)ざりしかば目録のみ残りて詞はなしこゝに桃花の林にあそびてえよう(果葉)の塵をつく一人の童侍りへ中略正月七日のあつ物より十二月晦日の事にいたるまですぢ(そこ)はかもなきあまのもくづをかきあつめてしづかたく火のほかに世の諺をあらはさんとする事しかり

天文第十三曆中春下旬日／正二位行権大納言藤原兼終(冬)／秀齒十六歳撰之

愚竹馬昔作此抄今遮眼前頗不思／議之間詞等有之自嘲不少溼(堅)可禁／外見無之也／御判生年廿歳

天文廿年仰侍從兼和書写畢

むしろ兼冬がその大部分を補筆して完成させたもので、天文十三年(一五四四)に成立した。この『世謔問答』は、大本三卷三冊、絵入で出版され、巻の始めに目録がある。たとえは中巻の五月は「ちまきの事」「同日薬玉とてかくる事」「同わらはべの小弓を持いんじんの事」「五月九日の今宮まつりの事」である。ただし実際は、「ちまきの事」の前に「五月五日にしょうぶをもちゆるいわれ」の本文がある。

五月

問て云

五月五日にしやうぶをもちゆるいはれは何のゆへにて侍ぞや

答混明百節のしやうぶとて一寸がうちに百ふしのあるしやうぶあり。かのしやうぶの根万ひやうをいやすといへり。されば百ふしなけれどもこれをいはひ侍るなり。さけ中に入あるひは帯にし。あるひは。沐浴に入侍る事は本草。また大載礼月令など。いふ。書に侍ることなり。

問て云

けふ。ちまきくふは。何の。ゆへにて侍るぞや。

答むかし高辛氏の悪子五月五日に舟にのりて海をわたりし時。暴風にはかに。吹てなみにしづみけるが。水神となり

『天和長久四季あそび』と『世謔問答』

て人をなやましけるに。ある人色の糸にてちまきをして。海中になげ入しかば。五色の龍となるそれよりして海神人をなやまさずと申つたへたりまたはくつげんか汨羅にしづみ魚腹に葬せし楚人のまつりし供物とも申にや。

〔世諺問答〕中巻、八丁裏く九丁表・十丁裏

この「ちまきの事」の間、九丁裏に「五月五日のちまきゆらい」、十丁表に「五月五日に子どもいんちんの所」の挿画がある。『世諺問答』の挿画は全部で一九図ある。

一方、図1『四季あそび』『五月節句』の場面と、以下はその翻字である。前記の『世諺問答』傍線部と、次の翻字を比較して欲しい。(句読点は私に付した。『四季あそび』の図版はすべて国立国会図書館本による。)



かものけいばは五月朔日ニあしそへあり。同五日が御まつりにて、そうぞくをきてむまにのり、両方ニたちならびかけ出し、一二をあらそひのる也。

此月五日せうぶのせつくとてせうぶをもちゆること、こんめいひやくせつのしやうぶとて一寸がうちニ百ふしのあるしやうぶ有。かのしやうぶのね万びやうをいやすといへり。されば百ふしなければ共是をいはひ侍る也。

又ちまきをくふは、むかし高辛氏の悪子五月五日にふねニのりてうみをわたりし時、ほ風にはかにふきてなみにしづみけるが、水神と也て人をなやましけるニ、ある人色の糸にてちまきをして海中ニ



図1 『四季あそび』「五月節句」

なげ入しかば五色の龍となる。それよりしてかい神人をなやまさず。

かものけいは

子共いんじんをする

「さてくあぶなや」「まけなく」

「つよいやつじや。にげく」「おのれのがさぬぞ」

「くわせく」「あにさままけやぬな」

せつくのぼりかぶとみる

「のふうば、あのかぶとをみや」

せつくれいしや

つまり『四季あそび』は『世諺問答』から、漢字を仮名に改めたりして、ほぼそのまま引用している。このような『世諺問答』からの引用は『四季あそび』一二ヶ月において、四月以外のすべての月にみられ、その数は一七項目にのぼる。これを表にしたものが次の『四季あそび』目録本文対照表である。表の一段目は月、二段目に「文」と「絵」とあるのは、三段目の『四季あそび』目録の項目が、上欄の文と下欄の絵のどちらで説明されているか、ということである。四段目の絵項目は、下欄の画中四角で囲んである部分で、上欄本文との関係が深いものである。絵項目がないか、多い場合は、丸カッコで囲んだ。五段目は『世諺問答』から引用している項目名である。たとえば正月の絵には門松や注連縄が当然描かれているし、『四季あそび』の「かど松の事」「ほながゆづりはの事」「かざりなわの事」は、上欄の文で『世諺問答』「門松の事」から引いているという意味である。六段目の絵項目は『世諺問答』の挿画の中で四角で囲んである部分を指す。



『四季あそび』目録本文対照表

4	3	2	1	月
文 文 文	文 文	文	文 文 文 文 文 文	欄
ふじ見のこと さんわうまつりの事 ゑいざんまいりの事	はな見の事 にはとりあわせのこと	はつむままいりの事	かど松の事 ほながゆづりはの事 かざりなわの事 はねつくこと たまうつこと さうにいふ事	四季あそび目録
〔ふじをけんぶつ〕 〔山王まつり〕 〔卯月八日ゑい山へ登ル〕	〔ぎよみつ〕 〔ぎをん社〕〔おむろ〕 〔さが〕	(稲荷神社境内の様子) 〔こども鳥合する〕	(門松) (歯朶・譲葉) (注連縄) 〔はねつく子〕 〔こどもたまうつ〕 (正月の宴)	四季あそび絵項目
	同鶏合の事	はつ馬の事	正月をむ月といへる事 門松の事 一 〔歯朶・譲葉〕 ← 〔注連縄〕 はごいたの事 木丁の玉うつ事 ← 〔正月の餅〕	世諺問答引用部項目
	〔もろこしの明皇と申〕 〔とり合あるところ〕	〔はつ馬のゆらい〕 〔かつほうとうじのものにていねおいし老翁相〕	〔子どもはねつく所〕 〔たまうつところ〕	世諺問答絵項目
		稲荷祭		公事根源項目

9		8		7		6		5			
文	絵	文	文	文	文	文	文	文	絵	文	文
きくのせつくの事	月見の事	ほうじやゑの事	しやうれうまつりの事 ぼんのをどりの事	七夕の事	みたらしまいりのこと	ぎをんゑのこと	かものけいば	いんじんのこと	ちまきくふ事	せつくのこと	
(菊を見る殿上人)	(月見の男達、僧、若衆)	〔八わた山〕	【七月大をどり】		〔七日のぎをんゑ〕 〔七日の山をわたす〕 〔たゞす川にて水あびる〕		〔かものけいば〕	〔子共いんじんをする〕	〔せつくの礼しや〕	〔せつくのぼりかぶと見る〕	〔せつくのぼりかぶと見もちゆるいはれ〕
九月九日に菊の酒を吞事		八月に放生会の事	十五日に生霊まつる事	七夕に物たむくる事		七日に祇園会の事		ちまきの事			* 五月五日にしやうぶをもちゆるいはれ
〔ぎのぶんてい御年十五才〕 〔ごくそと申仙人きくを〕	〔ほうじやうゑのゆらい付やはた〕 〔ほうじやう川えうおはなす所〕			〔七夕に物をたむくるところ〕				〔五月五日にちまきゆらい〕 〔五月五日に子どもいんぢんの所〕			
重陽宴		石清水放生会	盂蘭盆	乞巧奠		祇園御霊会		左右近馬場騎射	端午節	五月節会	献菖蒲

『天和長久四季あそび』と『世諺問答』

10	11	12	文	いこの事 神無月の事 もみじ見の事	「いのこくばる所」 同亥の子の事 十月を神無月といへる事	奉所	亥子餅		
文	文	文						おひたきの事	せつぶんの事 正月ことはじめ すはらいの事 もちつく事

表の最後の段に『公事根源』項目というのがあるが、これは『世諺問答』の筆者でもある一条兼良が著した宮中での年中行事の本を、兼冬が『世諺問答』を補筆するときに参加している項目である。たとえば『公事根源』「端午節」と『世諺問答』の「ちまぎの事」は内容が同じであるし、「同わらはべの小弓を持いんじんの事」には次のようにある。

問て云

けふわらはべの小弓こゆみをもちていんちいんちとして侍るは。何のゆへぞや。

答むかし左右近衛さうごのの馬場ばばにて。馬うまにのりてゆみいし事の侍るなり。ひをりの日なども申にやこれらをや。いんちのはしめとは申べからん

ここは『四季あそび』が直接引用しているわけではないので表中の引用部項目には含んでいないが、この『世諺問答』の記述が『公事根源』「左右近馬場騎射」を指しているのは明瞭である。ちなみに『世諺問答』の挿画「五月五日に子どもがいんちんの所」は、手に小弓を持った子どもが、三人ずつ川をはさんで石を投げあったり、矢を構えたりしている図である。「いんちん」とは、五月の節句に行う子ども遊び「印地打」のことで、「石打」がなまったものと言われている。図1の『四季あそび』の絵では子ども達の台詞入りで生き生きと描かれているが、手に持っているものは小弓ではなく長刀や菖蒲刀に代っている。

七月の『四季あそび』は「七夕のこと」「しやうれうまつりの事」「ほんのをどりの事」で、本文は以下の通りである。

七月七日七夕といふて、けんぎうしよくじよの二つのほし、あひあふ夜也。かさゝぎ橋と也て、しよく女をわたすよし也。香花をそなへ、くゞをとゝのへて、ていしやうに文を置、さほの橋(たせ)五しきの糸をかけて一事をいのる、三年の内ニかならすかなふといへり。

又十五日ニしやうれうをまつる事、是は仏でもくれんはじめて六道を得テ、其はゝのあり所をみるニ、がきの中に有しかば是をかなしみ、しやくそんニむかひ奉りしかば、七月十五日ニ僧をくやうせば、此くるしみをすくはんととさ給ひしよりはじまれり。

七月十五日ニめうくはんざい人をいましむる日なれば、けふをもて仏事をいたす也。

やはり『世諺問答』の「七夕に物たむくる事」と「十五日に生霊まつること」の二項から引いている。また、『公事根源』「乞巧奠」「盂蘭盆」の記述もほぼ同様である。しかし下欄では「大をどり」の絵が主になっていて、目録の「ほんのをどりの事」の項目は絵でのみ示されている。つまり上欄の本文が、下欄の絵の説明という体裁が崩れているのである。図

2は『四季あそび』「七月大をどり」の場面であるが、図3と比べると、中央の縁台に三味線弾きが座り、口に扇をあてた男、それを取り囲むように円陣をつくって踊る絵の構図、提灯の紋などがよく似ている。この図は『稀書解説』では、「七月の『大踊』は踊り口説きなり。即ち後の盆踊りの前身にして、江戸のそれと別に変りたる所なきやうなり。万治の頃、友甫といふ者の諷ひ出したること」としている。

成田守氏『盆踊りくどき』<sup>(6)</sup>は、現代に残る口説き節を収集したものが、それによると旧暦七月十三日から十六日に中央の精霊棚が新盆の家からの切子灯籠を囲んで踊り、鳴物は太鼓や笛である。新盆の死者が子どもである場合は『賽の河原』、大人であれば『目蓮尊者』などが口説かれるところもあった。そこでの口説き人は扇を持つか傘を持つかし、円の中を歩きながら口説く。唄い続けるには必ず踊り子が囃詞を入れなければならず、口説き人が交替する場合にも受継ぎを示す文句が歌われるという。図2下欄はこの場景を切り取っているのである。踊り手が「いつかいな」「おおでつかいな」「ふれ〜」と囃し、中央で口に扇をあてた口説き人が「とうざい〜しづまりたまへ。さらばついでにながなはなそ」と口説き始めを表す文句を歌っている。人物の台詞が画中に書き込まれるという手法はこれ以外にもいくらかあるが『四季あそび』の絵の特徴でもあり、それが成功している。絵本では『おぐり判官てるて物語』に、照手姫「一引き引けば千僧供養……」や、餓鬼阿弥の車を曳く子ども達の「えいや〜」というかけ声の例がある。<sup>(7)</sup>

#### 図4 「十二月のてい」は

極月ニなれば、一年のきはめ月とてすゝをはらひ、十三日より事はじめとして、正月の物をうりはじめ、もちをつけば、せきぞろうばらがせがみ、物せわしき月也。

さてせつぶんのまめうつ事は、何のゆへにてか候。されば、年こしと世俗にいひならはして、こよひはあつきの夜行するゆへニ、きんちうにもいんよりやうさいもんをよみ、上卿已下是をおふ。御所ニともしびおゝくとほし、お

そろしげなるめんをきて、手たてほこをもち、だいのりの四門をまつる也。又てんじやう人共、御てんのかたニ立て、もゝのゆみ、よもぎの矢にていはらふ。是らをかたどり、まめうちておにをはらふ事はじまれる也。

とある。この後半が『世諺問答』「十二月に節分のみめ打事」からの剽窃である。目録の「正月ことはじめ」「すすはらひの事」「もちつく事」については前半の一節でごくわずかに触れているだけではあるが、下欄の絵の説明には違くないので、表中では「文」と判断した。「正月ことはじめ」の物売り達に交じって、節季候や姥等など勸進芸人の姿が描かれている。『稀書解説』では「人倫訓蒙図彙」に似通ひたる所あり」としていたが、確かに画中に物売りや門付芸人が多く登場することも『四季あそび』の特徴の一つである。つまりこのような部分が作者の興味の対象である。桜を愛で、踊りに興じる町人や、遊びまわる子どもなど、むしろ『世諺問答』に頼らない記述や絵から、庶民生活に対する作者の愛情のようなものが感じられる。

『四季あそび』『世諺問答』『公事根源』は、本文そのものが似ていることもあるが、逆に考えると、平安時代の宮廷行事から中世を経て近世の一般庶民の年中行事として生き残り、変化、定着していく推移がわかるものと言える。また、すでに室町時代に成立した『世諺問答』を通俗化することで、さらに絵本の享受層である一般庶民、特に子女への啓蒙、娯楽化という本来の役割を明確にしているのである。

#### 四

『月次のあそび』については、既に佐藤悟氏、松平進氏<sup>(9)</sup>によって精細な調査がなされている。それらによると、『月次のあそび』は延宝八年初版本が存在し、元禄四年版本は延宝八年版本の後摺りではなく、天和二年一二月の江戸大火によ

って板木が失われたことによる改刻本であるという。仲田勝之助氏『絵本の研究』<sup>(10)</sup>の年表では「月次遊 大一冊 天和三年七月／吉兵衛画」となっていて、天和三年版が存在する可能性もあるが、今のところ所在は確認されていない。

東京大学総合図書館には元禄四年版『月次のあそび』（請求記号、A00-5771）と延宝八年版『年中行事之図（仮題）』（請求記号、A00-6567）の二本が所蔵されている。この『年中行事之図』は、一丁表と二丁中央部が欠けていて後述する序文は認められないが、刊記には「延宝八申歳七月吉日／大和絵師菱川師宣／柏屋与市開板」とあり、師宣在銘である。延宝八年に出版されていたということは、『四季あそび』の作者が十分これを見ていた可能性がある。図2と図3『年中行事之図』（月次のあそび）との類似はこれを証明するものではないだろうか。

元禄四年本『月次のあそび』の序は次のような一文である。

爰に江城のほとりに菱川氏の誰といひし絵師、二葉のむかしより此道に心を寄、頃日うき世絵といひしを自然と工夫して今一流の絵師となりて、冬の山に花をさかせ、鬼神にもおとろしき頭をかたぶけさせぬ。過し秋なか／＼し夜をひとりともし火のもとにて筆をとりそこはかたなく十二月のしなきためとて書畢ぬ。是も只もおきなんと取集め一冊の小草紙となし、世のなぐさみにと所々にことほりをかきくわへておくのみ。

上欄に文、下欄を広く絵にあて、当世の風俗を描くという絵本の形態は、まず江戸の菱川師宣によって大成された。これまで見たように『四季あそび』は上欄の本文のほとんどを室町時代の『世諺問答』によっているので、資料としての魅力はやはり絵のほうにある。その引用の量からも、本を作る段階から絵師優先の作であり、画面構成などに並々ならぬ技量を感じられる。この頃の絵師を評した有名な一節、宝永七年の『寛濶平家物語』巻四「微塵も絵図に違ぬ女」に

板行の浮世絵をみるにつけても、むかしの庄五郎が流を、吉田半兵衛まなびながら一流つづまやかに書出しければ、京大坂の草子は半兵衛一人にさだまりぬ、江戸には菱川、大和絵師の開山とて、坂東坂西此ふたりの図をうつしける

とあるように、江戸の菱川師宣に対して京都の吉田半兵衛という二人の実力派がならび称されている。つまり『四季あそび』は、師宣の『月次のあそび』に刺激された半兵衛、もしくは半兵衛に擬する誰かが、江戸の師宣への対抗意識から、絵師としての意地をかけて、地元京都の風俗生活を写し取った作品と考える。

次の年表は吉田半兵衛風の挿画をもつと思われる本を、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』(『挿画史』を基本に、寛文四年から元禄六年までの間で、『絵本年表』(『絵本』)、『好色物草子集』(『好色』)、『国書総目録』(『国書』)などから抜き、年代順に並べたものである。

寛文五	日本二十四孝(画)	挿画史	延宝元	ごわうの姫(画)	挿画史
寛文六	伽婢子(画)	挿画史	天草物語(画)	挿画史	
寛文七	理屈物語(画)	挿画史	山城四季物語(画)	挿画史	
寛文九	夫婦宗論物語(画)	挿画史	葛葉道心(画)	挿画史	
寛文十	由来明鑑集(画)	挿画史	日本王代記(画)	挿画史	
寛文一一	鎮西八郎為朝(画)	挿画史	蘆分船(画)	挿画史	
	一休諸国物語(画)	挿画史	為義産宮詣(画)	挿画史	
	宝蔵(画)	挿画史	酒顛童子(画)	挿画史	
寛文一二	小盃(画)	挿画史	出来齋京土産(画)	挿画史	
	業平一代記(画)	挿画史	神武天皇(画)	挿画史	



延宝五

信田妻(画)

挿画史

貞享元

百夜小町(画)

挿画史

頼光跡目論(画)

挿画史

夕霧七年忌(画)

挿画史

新板平家物語(画)

絵本

貞享二

伊勢物語絵入読曲(画)

絵本・国書

延宝六

住吉相生物語(画)

挿画史・絵本

宗祇諸国物語(画)

挿画史・絵本

松浦五郎景近(画)

国書

絵入あまやとり(画)

絵本

延宝七

軽口にがわらひ(画)

挿画史

葉師靈場記(画)

絵本

古今狂歌仙(画)

絵本

有馬山温泉小鑑(画)

絵本

延宝八

囃物語(画)

国書

貞享三

◎好色訓蒙図彙

挿画史・絵本

延宝九

名女情比(画)

挿画史

(画・文／署名有)

好色・国書

(天和元)

花山院后諱

挿画史

好色一代女(画)

挿画史・好色

つれづれ草(画)

挿画史

好色五人女(画)

挿画史・好色

長崎土産(画)

挿画史・絵本

本朝二十不孝(画)

挿画史・好色

乱曲揃(画)

挿画史・絵本

好色三代男(画)

挿画史・国書

七人比丘尼(画)

挿画史

好色伊勢物語(画)

挿画史

和気清麿(画)

挿画史

諸国心中女(画)

挿画史

天和二

好色袖鑑(画)

好色・国書

夕霧追善物語(画)

挿画史

天和三

歌仙金玉抄(画)

絵本

難波立聞昔語(画)

挿画史・絵本

鳴原大和こよみ(画)

絵本

伊勢講并参宮儀式(画)

絵本・国書

風流嵯峨紅葉(画)

絵本

清明通変占(画)

絵本・好色

貞享四

◎女用訓蒙図彙(画・文)

挿画史・国書

元禄元

諸国新百物語(画)

挿画史

◎男色十寸鏡(画・文)

好色・国書

好色通変歌占(画)

好色

◎好色貝合(画・文)

挿画史・絵本・好色・国書

人倫糸屑(画・文)

好色

好色・国書

絵入庭訓往来(画)

絵本

◎山路の露(画)

挿画史・国書

平仮名註下学集(画)

絵本

◎好色破邪顯正(画)

好色・国書

嵐無常物語(画)

国書

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

本朝桜陰比事(画)

挿画史

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

好色京くれない(画)

国書

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

婦人養草(画)

絵本

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

好色咄浮世祝言揃(画)

国書

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

人倫訓蒙図彙(卷一・二)

絵本

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

人鏡論(画)

絵本

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

野郎雛形(画)

挿画史・絵本

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

好色由来揃(画)

国書

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

蓑張草(画)

挿画史

元禄元

◎好色破邪顯正(画)

挿画史・絵本

元禄五

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

増補百人一首抄(画)

挿画史・国書

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

雨夜三盃機嫌(画)

挿画史・絵本

◎好色破邪顯正(画)

挿画史

男重宝記(画)

絵本

半兵衛個人については三田村鳶魚氏以来、『子孫大黒柱』巻二「心と書覚えたる富貴草」がよく引かれるところだが、略歴や画業など不明な点が多く、わずかな資料で類推するしかない。年表の中で二重丸がついている作品は半兵衛画として積極的に認められるもので、このうち貞享三年の『好色訓蒙図彙』には「絵師 洛陽 吉田半兵衛」と署名があり、確実に半兵衛作画と言える。絵の基準をこのあたりにもとめて「いわゆる吉田半兵衛風」と判断する。

『古版小説挿画史』によると、吉田半兵衛は初期に地誌類の挿画を多く手がけている。和田万吉氏『古版地誌解題』ではこうした地誌類の嚆矢である、明暦四年刊『京童』の挿画について「筆名は無名なれど恐らくは当時京洛画家として名ある吉田半兵衛などならん」とある。<sup>(15)</sup>しかし水谷説では「京童の画系」として吉田半兵衛の画業とは区別している。絵の類似という点から見ると、図1の「かものけいば」の絵は『京童』巻三「かも」、『山城四季物語』巻三、『出来齋京土産』「上かもけいば」。その他『京童』「ひよし」と『四季あそび』「山王まつり」、『出来齋京土産』「おむろの御所」と『四季あそび』「たかをのみち見」、『山城四季物語』巻六と『四季あそび』「子共おひたきはやす」などと類似している。もちろん、画題が同じだから絵が似ても無理はない。だが、『四季あそび』「十二月のてい」(図4)と西鶴の『日本永代蔵』二ノ一「世界の借家大将」の挿画(図5)<sup>(16)</sup>が酷似している。たとえば場面中央に子ども遊び道具であるぶりぶり、羽子板売りや小鯛売りがいたり、『四季あそび』の左中央にいる、頭にシダの葉をつけた節季候が、『永代蔵』では土間に入っている。右端の墨塗りの籠を背負った物吉と『永代蔵』の絵で袋を左肩に背負った男の顔やポーズもそっくりである。少なくとも『四季あそび』を見ていたとは言えるだろう。

吉田半兵衛は西鶴本の挿画を多く書いた人でもあり、仮名草子の地誌類の挿画も多く手がけていると考えられる。時期的にもそのちょうど中間にある『四季あそび』が、吉田半兵衛作・画とすれば、若い頃地誌類の挿画を手がけたキャリアが、一旦『四季あそび』として収斂し、オリジナルの好色物草子、さらに西鶴本の挿画へと拡大していくさまがうかがえるのではないだろうか。



図2 『四季あそび』「七月大をどり」



図3 『年中行事之図』(月次のおそび)



図4 『四季あそび』「十二月のてい」



図5 『日本永代蔵』卷二ノ一



(1) 『若樹文庫取得書目』(日本書誌学大系三〇、青裳堂書店、昭和五八年)二七頁

(2) 『稀本あれこれ―国立国会図書館の蔵書から―』(出版ニュース社、平成六年)にも紹介がある。

(3) 『稀書解説』上(書誌書目シリーズ九、ゆまに書房、昭和五四年)。また、『新編稀書複製会叢書』絵本・雛形本三四(臨川書店、平成三年)には『天和長久四季あそび』と『月次のあそび』の影印と解題、『日本名所風俗図会』別巻 風俗の巻(角川書店、昭和六三年)には稀書複製会本の影印と翻刻がある。

(4) 以下の『世諺問答』は内閣文庫本(請求記号、145-54/145-55)を底本に用いた。一部意味不明な点は同書の清原国定書入れ、および『新校群書類従』(名著普及会、昭和五八年)によってカッコ内に補った。万治三年版『世諺問答』は『近世文学資料類従』仮名草子編九(勉誠社、昭和四八年)に影印と解題がある。

(5) 稀書複製会の『万歳踊』は、万治三年七月京都今出川助左衛門版で、「友甫流踊り口説き」の文句を長短あわせて十八編収めているが、その最後に次のような文句がある。

これはどこおどり多い此や。いかにおどりに。しんびやうにたのむ。てびやうしをそろえて。おどりにてたされ。やんれ世の中におとるたぐひも。あまたにござる。きやり。石引。やれ。しゝおどり。かくる馬のあし。つちのこのこがたなも。ゑい。此おどる。あたまのおどりに。むねのおどり。つかひれたるいぬも。ゑい此なりひらおどり。はらつゝみ打たぬきも。おとる。百になるまでおとりわすれぬ此むらすゑ。小町おとりや。きそおとり。おいせおどりに。すみよしおとり。念仏おどりに。だいもくおとり。北さがおどりはつゝらぼしをしやんときて、おとるふりかおもしろい。とかくおどれやれ。こゝろかすは、たれ人かおとるべい。あたゝうきよはきまゝにやつて。おどれやれふれやれ。ゑい此。ふれ〜。ふる。つまいとしな。

図3の『月次のあそび』上欄本文はこの口説き節を取り入れていると思われる。

(6) 成田守氏『盆踊りくどき』(桜楓社、昭和四九年)

(7) 岡本勝氏『初期上方子供絵本集』(角川書店、昭和五七年)、中野三敏氏・肥田皓三氏『近世子どもの絵本集』上方編岩波書店、昭和六〇年)、『おぐり判官てるて物語』は三重県松坂市射和寺地藏仏胎内から発見された十程度の子供絵本の一つで、同書の岡本氏の解説によると、延宝三年版の説経浄瑠璃『おぐり判官』を下敷に、本文を仮名に改めたり拾い読みをして作っているとされる。

(8) 佐藤悟氏『月次のあそび』初版本の発見と報告―師宣絵本への疑問―(青裳堂書店『書誌学月報』第二五号、昭和六一年)

- (9) 松平進氏『師宣祐信絵本書誌』（日本書誌学大系五七、青裳堂書店、昭和六三年）
- (10) 仲田勝之助氏『絵本の研究』（八潮書房、昭和五二年）
- (11) 水谷不倒氏『古版小説挿画史』（『水谷不倒著作集』五、中央公論社、昭和四八年）
- (12) 漆山又四郎氏『絵本年表』一（日本書誌学大系三四、青裳堂書店、昭和五八年）
- (13) 西鶴学会編『好色物草子集』（古典文庫、近世文芸資料十、昭和四三年）
- (14) 三田村鳶魚氏「吉田半兵衛」（『三田村鳶魚著作集』二一、中央公論社、昭和五二年）。初出は『錦絵』第二七号（大正八年六月）。
- (15) 和田万吉氏著・朝倉治彦氏増補『新訂増補古版地誌解題』（国書刊行会、昭和四九年）。同書の『南都名所集』の項に「挿図は概ね社寺の景観にして、図中の人物大なり。筆力溫柔恐らくは『出来齋京土産』の画者と同一人ならん。杉の樹立に一種特殊に描法あるに注目すべし」とあり、同様の杉は『京童』『山城四季物語』などにも見られる。
- (16) 図5は『近世文学資料類従』西鶴編九（勉誠社、昭和五一年）から複写、転載した。

〔付記〕本稿は第四一回駒澤大学国文学大会（平成九年十一月三〇日実施）での口頭発表に加筆しました。発表の席上、富士昭雄氏、林達也氏にご教示を賜り、江本裕氏、石川了氏には発表前後にわたって種々のご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。また、所蔵資料の閲覧、複写を許可してくださった、国立国会図書館、内閣文庫、東京大学総合図書館に御礼申し上げます。